

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K03099

研究課題名(和文)現代都市下層社会と「民衆的知識人」に関する研究 大阪「釜ヶ崎」の事例を中心に

研究課題名(英文)Study on modern city lower social stratum and "intellectual of the people"

研究代表者

能川 泰治 (Yasuharu, NOGAWA)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：30293997

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、聞き取り調査の成果と文献史料を駆使することによって、一般に日雇労働者が集住するまちとして知られる、戦後の大阪市の「釜ヶ崎」地域における社会運動と労働者文化の形成過程を明らかにしようとするものである。成果としては、ミニコミ雑誌の分析を通じて日常生活の構成を促す労働者文化と、理不尽な社会の在り方に対して怒ることを促す労働者文化が形成されていることを明らかにした。また、長年にわたって釜ヶ崎で暮らしながら社会運動に取り組んでいる女性のライフヒストリーを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義としては、従来の日本現代史研究では顧みられることのなかった釜ヶ崎という地域を事例に、労働者文化の形成過程を明らかにしようとしたことが挙げられる。また、社会的意義としては、釜ヶ崎という地域は単に日雇い労働者が暮らす街として存在するだけでなく、そこでの社会運動を通じて日本社会を内側から問い直す発信をしていることを明らかにしたことが挙げられる。

研究成果の概要(英文)：This study is going to clarify the social movement in the "Kamagasaki" of postwar Osaka that is known as the town where a day laborer does live generally by making full use of result and documents historical materials of the hearing investigation area and the formation process of the worker culture. As result, I clarified that worker culture to promote that I had square it for worker culture to promote constitution of the everyday life through the analysis of the communication among limited number of people magazine and the unreasonable social way was formed. In addition, I clarified the life history of the woman who worked on a social movement while living Kamagasaki for many years.

研究分野：日本近現代史

キーワード：都市下層社会 釜ヶ崎 民衆的知識人

### 1. 研究開始当初の背景

私は、大学院に入学した1990年から現在に至るまで、一貫して都市下層社会の研究に取り組んできた。都市下層社会研究は日本近現代史研究の中で豊富な研究業績を積み上げてきた分野の一つであるが、その考察対象となっている時期は1890年代から1920年代に集中していて、戦後の都市下層社会に関する研究、特に「釜ヶ崎」のような寄せ場地域に関する研究は皆無である。同様の偏りは、戦後社会運動史研究についても言える。戦後の社会運動に関する研究は、その主体形成や民主主義成熟のあり方について、多方面にわたる豊富な研究成果を積み上げてきた。しかしながら、現在の研究水準を示す広川禎秀・山田敬男編『戦後社会運動史論 - 高度経済成長期を中心に - 』（大月書店、2012年）においても、高度経済成長期に頻発した「釜ヶ崎」暴動や、当該地域で展開した社会運動は取り上げていない。その意味では、戦後の「釜ヶ崎」が発信していることに対して、日本近現代史研究は見向きもしてこなかったということになるであろう。

### 2. 研究の目的

本研究は、聞き取り調査の成果と文献史料を駆使することによって、一般に日雇労働者が集住するまちとして知られる、戦後の大阪市の「釜ヶ崎」地域における社会運動と労働者文化の形成過程を明らかにしようとするものである。その際に、「民衆的知識人」という概念を用いて運動の主導者を分析し、さらに戦前に同様の活動をした人物との比較を試みることによって、日本近現代のデモクラシーの性格を展望することも目標としている。

### 3. 研究の方法

2017年度と2018年度は文献史料の収集に取り組み、2019年度以降は、高度経済成長期以降の「釜ヶ崎」で長く暮らしたことがある人からの聞き取りに取り組んだ。また本研究は、「釜ヶ崎」の現場で地域再生活動に取り組んでいる方々のうち、私が大阪に国内留学をしていた2008年度に知遇を得た方に研究協力者になっていただき、聞き取り調査に協力してくれそうな人の紹介や、史資料の所在についての情報提供をしていただいた。

### 4. 研究成果

第一の成果としては、ミニコミ雑誌の分析を通じて日常生活の更生を促す労働者文化と、理不尽な社会の在り方に対して怒ることを促す労働者文化が形成されていることを明らかにしたことが挙げられる。この点については、2017年4月21日に、西成市民館が主催する第51回釜学研究会で「高度経済成長期の大阪・釜ヶ崎における文芸サークル活動 - 「裸の会」の活動を事例に - 」というタイトルの研究発表を行った。そこで発表したことの要旨は、「裸の会」の活動の歴史的意義は、高度経済成長期の都市下層社会における表現支援活動と、そこで培われたコミュニティを基盤とする地域再生活動として位置づけられるべきものであり、様々な限界や問題はあるが、現在の「釜ヶ崎」における地域再生活動の先駆として位置づけられるというものである。また、そこで表現された人びとの声は、「釜ヶ崎」という地域で生きるということ、即ち労働・家族・地域・戦争体験を主題とするものが多いこと、さらに共通して更生意欲と暴動批判が多くみられるという意味では、限られた人びとを担い手とする規範文化の形成を意味するものでも指摘した。

第二の成果としては、釜ヶ崎で長らく暮らしながら日雇労働者として生きてきた人びとや、様々な社会運動に取り組んできた人びとからの聞き取りに基づく研究成果を発表できたことである。

まず2019年8月3日に同時代史学会関西研究会で、「釜ヶ崎に生きる」ことのオーラル・ヒストリー - 現代都市下層社会の歴史的研究序説として - 」というタイトルの研究発表をすることができた。この報告では、以前から取り組んできた、釜ヶ崎で日雇労働者として長らく暮らしてきた人びとからの聞き取りを総括し、高度経済成長期以降の歴史像として何が見えてくるのかを明らかにしようとした。結論としては、企業社会を支えるライフコース(高学歴・終身雇用・中流家庭の形成・通俗道徳の実践など)からリタイアした人びとがたどりつき、経済成長を最底辺から支える使い捨て可能な臨時労働力として企業社会に提供される一方、このような「難民」が「棄民」扱いされることに憤りと疑問を感じて集まった人びとの働きかけを通じて、釜ヶ崎という地域は現代日本社会批判の発信力を養いつつあることを述べた。

続く2020~2021年度にかけては、長年にわたって釜ヶ崎で暮らしながら社会運動に取り組んでいる女性のライフヒストリーを明らかにしたことが挙げられる。この点については、「聞き取り記録 ポスト高度経済成長期の釜ヶ崎を生きる日本人女性のライフヒストリー」というタイトルの論稿として、『金沢大学歴史言語文化学系論集 史学・考古学篇 第13号』に掲載することができた。この聞き取り記録で紹介した女性のライフヒストリーは、高度経済成長期に集団就職で郷里の九州から大阪に出てきた後、職業を転々としながら労働組合運動やベトナム反戦運動などの社会運動に参加し、さらにキューバでのサトウキビ刈りボランティアやパレスチナでの医療ボランティアに参加し、帰国後には釜ヶ崎に生活の拠点を移し、そこで野宿生活者支援をはじめ

めとする様々な運動に関わりながら今日に至っている、というものである。

さらに 2021 年度末の 2022 年 3 月 18 日に、金沢大学内で行われた教員の研究グループが主催するミニシンポジウムで「キューバ・パレスチナ・釜ヶ崎 - ある日本人女性のライフヒストリーにみる現代の世界と日本の都市社会 - 」というタイトルの研究報告を行なった。そこでは、上記女性のライフヒストリーを歴史的に位置づけることによって、当時の日本と世界との関係や、日本の都市社会について何が見えるのかを問い、結論としては、当該期の日本の経済大国化は高度経済成長を底辺から支える若者にとって「息苦しい」時代の始まりでもあったということ、そのような若い世代の精神的支柱となったのは、不安定な労働力としての境遇を同じくする者同士の共同性と世界情勢であったこと、そして、そのような日本と世界との関係を考察するには、日米関係や東アジア世界という枠を超える（第三世界を視野に入れる）必要があることを述べた。さらに、そのような社会の雰囲気の中で革命の実現を目指して行動したが挫折・中断を余儀なくされ、しかしそれでも日本社会を問い直すことへの思いを捨てきれない人びとが集い、発信し、「難民」として辿り着いた人や志を同じくする者との関係を再構築する拠点として、釜ヶ崎という地域は存在するということを提起した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 能川泰治	4. 巻 13
2. 論文標題 聞き取り記録 ポスト高度経済成長期の釜ヶ崎を生きる日本人女性のライフヒストリー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金沢大学 歴史言語文化学系論集 史学・考古学篇	6. 最初と最後の頁 1-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 能川泰治
2. 発表標題 「釜ヶ崎に生きる」ことのアラル・ヒストリー - 現代都市下層社会の歴史的研究序説として -
3. 学会等名 同時代史学会 関西研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 能川泰治
2. 発表標題 高度経済成長期の大坂・釜ヶ崎における文芸サークル活動 - 「裸の会」を事例に -
3. 学会等名 第51回釜学研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 能川泰治
2. 発表標題 キューバ・パレスチナ・釜ヶ崎 - ある日本人女性のライフヒストリーにみる現代の世界と日本の都市社会 -
3. 学会等名 金沢大学ボトムアップ型研究課題（歴史学）ミニシンポジウム
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------